

地域の魅力化をめざす学校・地域連携カリキュラムづくり

ーコミュニティ・スクールのしくみを活用した社会に開かれた教育課程の編成ー

近江誠一郎*¹・田中由起枝*²・池田 廣司・静屋 智

Creating a school/regional cooperation curriculum aimed at making the region attractive :
Organization of a curriculum open to society that utilizes the mechanism of community schools

OMI Seiichiro*¹, TANAKA Yukie*², IKEDA Hiroshi, SHIZUYA Satoru

(Received August 3, 2020)

キーワード：コミュニティ・スクール、学校・地域連携カリキュラム、子どもと大人の熟議

はじめに

学びのための教材は教科書だけではない。学びの場所は学校だけではない。学びを提供する人は教員だけではない。子どもたちを取り巻く環境の中で、学びにつなげるための教育資源は数多くある。この教育資源と学習者をどのように結びつけさせるかが大切ではないかと考える。そのためには、学びのフィールドを学校から地域にまで広げ、子どもたちの生きる力を育むための教育環境の整備が必要である。

筆者は、平成30年度からの2年間、山口大学教職大学院に在籍し、所属校の山陽小野田市立埴生中学校で「学校と地域が連携・協働した活気に満ちた地域づくりー埴生地域協育ネットの事務局機能の充実を図る体制づくりー」を研究主題に掲げ、実践研究を行った。

これからの時代を生き抜いていく子どもたちのために、社会の変化や地域の実態を見据えながら、大人が子どもに何を教えるかではなく、学びを通して子どもが身につけるべき力は何か、子どもが何をどのくらい身につけたか、子どもが何をどこまで到達したかを意識していかなければならない。これらを可視化するための特色ある「学校・地域連携カリキュラム」は、有効な魅力あるツールであり、学校・地域連携カリキュラムは、学校と地域の連携の軸である。その名の通り、教員だけではなく、地域の大人、さらには学びの主体である子どもたちも一緒になって考えていく必要がある。

地域づくりの中心的存在である公民館のもつ機能を学習活動に有効に生かしつつ、子どもたちも地域の一員として、主体性をもちながら地域と関わっていく。このことによって、学びによる人づくりや地域づくりに参画していくことにつながり、地域の魅力化や活性化に向けた足がかりとなる。そこで本稿では、地域の課題解決や魅力化に向けた具体的な取組を、「学校・地域連携カリキュラム」の作成にどのように反映させていくのかについて、実践研究での取組をもとに、整理してまとめることにした。

1. 学校と地域の連携・協働に関する基本的な考え方

山陽小野田市は各小学校区に公民館が設置してあり、地域と連携・協働できる環境が整っている。さらに、筆者が勤務する埴生中学校は、2020年4月から小中一貫校となり、公民館を含めた複合施設が同一敷地内に隣接される。将来を担う子どもたちの育成に必要な学校と地域の連携・協働が推進しやすい環境が整えられることになる。そのため、地域学校協働活動のネットワークを生かした学びによる人づくりや地域づくりの好循環を創り出すことが期待される。

新学習指導要領では、「よりよい学校教育を通じてよりよい社会を創る」という理念を学校と社会が共有し、

*1 山陽小野田市立埴生小中一貫校（令和元年度山口大学大学院教育学研究科教職実践高度化専攻教育学校経営コース）

*2 萩市教育委員会（平成30年度山口大学大学院教育学研究科教職実践高度化専攻教育学校経営コース）

社会と連携・協働しながら未来の創り手となるために必要な資質・能力を育む『社会に開かれた教育課程』の実現」を重視することが示されている。

平成 28 年 12 月に示された中央教育審議会答申「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について」では、「社会に開かれた教育課程」としての重要な視点として、①社会や世界の状況を幅広く視野に入れ、よりよい学校教育を通じてよりよい社会を創るという目標を持ち、教育課程を介してその目標を社会と共有していくこと。②これからの社会を創り出していく子供たちが、社会や世界に向き合い関わり合い、自らの人生を切り拓いていくために求められる資質・能力とは何かを、教育課程において明確化し育てていくこと。③教育課程の実施に当たって、地域の人的・物的資源を活用したり、放課後や土曜日等を活用した社会教育との連携を図ったりし、学校教育を学校内に閉じずに、その目指すところを社会と共有・連携しながら実現させること。の3つを示している。

これらの視点から、「社会に開かれた教育課程」の実現においては、「よりよい学校教育を通じてよりよい社会を創る」という理念

の実現のためにも、学校の指導体制の充実、学校と地域との連携・協働が必要であると言える。具体的な取組としては、コミュニティ・スクール（学校運営協議会）と地域学校協働活動の一体的推進が挙げられる。

これらの視点を具現化していくために、学校と地域の双方で連携・協働するための組織的・継続的な仕組みの構築が必要であり、図1を構想した。

この図は、学校と地域のより良い連携・協働と目指す姿を示したものである。さらに、地域と一体となって子どもたちを育てていくために、目指す子ども像と目指す地域像も策定し、構想図の中に位置づけた。これらの目標や目指す姿、身につけさせたい資質・能力を具現化させていくために、地域学校協働活動のネットワーク機能である地域協育ネット（おおむね中学校区をひとまとまりとし、学校や保護者、地域の人々等が連携し、子どもたちの育ちや学びを地域ぐるみで見守り支援するためのしくみ）の活用を考案した。このしくみは、「開かれた学校」から一歩踏み出し、地域でどのような子どもを育てるのか、何を實現していくのかという目標やビジョンを地域住民と共有し、さらには、地域の課題解決に向けて、地域の活性化につなげていく「地域とともにある学校」をめざすものである。その具体的な取組の一つとして、キャリア教育に視点を置き、学校課題や地域課題の解決につなげていく学習である「地域ブランドづくり学習『THE 殖生学』」（以下「THE 殖生学」）を、9年間の「学校・地域連携カリキュラム」として設定した。

2. 「地域ブランドづくり学習『THE 殖生学』」構想

平成 30 年度の殖生中学校の学校教育目標は「自分が好き 仲間が好き、学びが好き、殖生が好きな児童生徒の育成」で、殖生小学校と統一したものと設定している。なお、同一校区内の津布田小学校の学校教育目標は、「学びが好き 人が好き ふるさとが好きな津布田っ子の育成」である。これらの学校教育目標のもと、地域に根ざした学校づくりを進めていくためには、地域について学ぶ学習の機会の必要性を感じた。また、2018 年度に文部科学省からの1年間の指定を受けて行った「起業体験学習推進事業」を通じて、地域を創るという視点で子どもたちに必要とされる資質・能力の育成に有効な学習であることが分かった。このためキャリア教育の柱として位置づけて継続して行うこととなった。さらには、殖生地域は瀬戸内海に

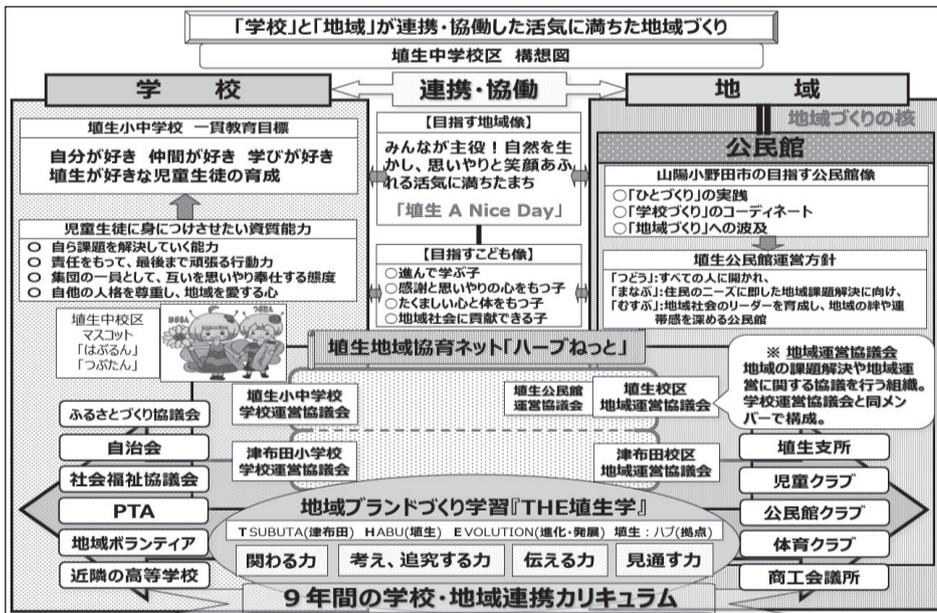


図1 学校と地域の連携・協働の構想図（殖生中学校区）

面しており、過去に台風によって甚大な高潮の被害を受けた地域でもある。最近では自然災害はどこにでも起きうると意識が高まりつつあり、安心・安全な暮らしに向けた様々な取組が各地で展開されている。このようなことから、子どもたちにも防災について学ぶ機会は不可欠であると考えた。

一方で、地域の課題に目を向けると「少子高齢化」「後継者不足」「防災教育」「伝統文化の継承」などが挙げられる。これらの課題から活力ある地域づくりに向けた取組が求められることが分かる。これらのことから、子どもたちが地域に目を向け、地域課題の解決にも寄与することで必要とされる資質・能力の育成のために、埴生地域ならではの学校・地域連携カリキュラムが必要であると考えた。そこで、学びによる人づくりと地域づくりのために学校と地域の協働が期待できる取組として構想したものが、「THE 埴生学」である（図2）。

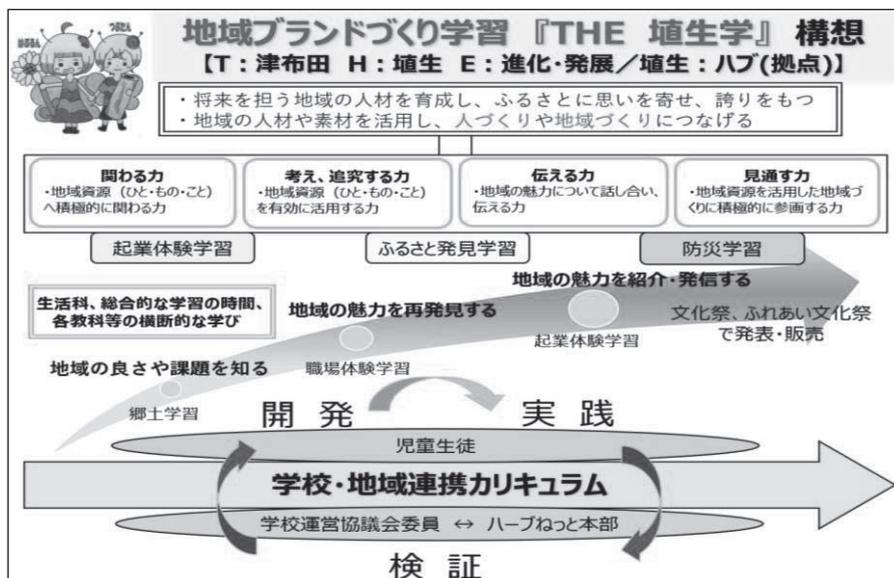


図2 「地域ブランドづくり学習『THE 埴生学』」構想図

学習の柱を「ふるさと発見学習」「起業体験学習」「防災学習」とし、それぞれに、地域を「知る」「創る」「守る」という意味が含まれている。生活科や総合的な学習の時間だけでなく、各教科等との横断的な学びとなるようにし、小中一貫した9年間の特色ある学びと位置付けられるものとした。学びの在り方について学校運営協議会や地域学校協働活動本部での会議を活用しながら、学びの主体である子どもたちとともに創り上げ、学びにつなげていくというものである。そして、地域の再発見に努め、ブランド化して地域を価値づけていきたいという願いや、埴生中校区の地域資源を活用して地域課題の解決や活性化につなげていきたいという思いが込められている。この学習の特色は、地域の「ひと・もの・こと」の地域資源を有効活用し、活気ある地域づくりにつながるように再発見、再構築していくという点である。さらには、学びのフィールドは学校だけではなく、地域全体であり、そこに関わる人は教員だけではなく地域住民も含まれている。これらの学習材を活用して、子どもたちには「関わる力」「考え・追究する力」「伝える力」「見通す力」の4つの力を身につけさせることとした。

2-1 地域の大人とともに学ぶ場の設定（埴生中校区「ふるさと発見学習」）

近年は、教育活動の中で、子どもどうしによる異年齢交流による教育効果が注目され、各学校で教育活動の一環として実施されるようになってきた。しかし、体験だけが重視される傾向があり、活動の目的も立場で異なる。通常の教室の中での単なる学び合いだけでは、異年齢交流の本来の目的が達成できるとは言い難い部分がある。

地域づくりを進めていくためには、まずは子どもたちが住む地域を想う心の育成を視野にいれ、子どもたちの住む地域を知ることからである。そこで、小中合同学習として、平成31年2月、校区内の小学6年生と中学1年生の異年齢構成のグループで、保護者や地域住民が参観する中、将来の地域の姿に関するワークショップを行った。そのプログラムは、①地域の「良いところ」と「気になるところ」を考える、②①を踏まえ、どのような地域にしたいか（理想の地域像）を考える、③②のまとめとして、キャッチフレーズ化する、の3つである。

このプログラムは、萩市立大島小中学校における「ふるさと大島学習」で行われたSWOT分析の手法や、山陽小野田市都市計画課が行ったまちづくりのためのワークショップの手法を参考にした。

小中合同学習でのプログラム①は、小中合同学習の事前学習として各学校で取り組んだ。担当学年の教員



図3 「えんたくん」を用いた熟議

も子どもたちの学習の支援にあたり適切なアドバイスを送っていた。子どもたちは地域のひと・もの・ことに着目しながら「良いところ」や「気になるところ」を掲げていた。子どもたちが自分の意見をもって、次の活動へ移るための機会である。

プログラム②③は、埴生公民館を会場とし、小中の異年齢構成のグループを編制し、プログラム①で事前に考えた意見をもってワークショップに参加した。実際のワークショップでは、円卓のような紙製テーブルを用いて行ったことで、子どもたちが雰囲気良く話し合いを進めることができ、その様子を見た地域住民や保護者からも好評であった。(図3)

子どもたちから出てきた意見を集約すると「地域についてもっと知り、活性化に向けて出来ることに関わって行きたい」「気になるところを良いところにするための方法を考えるようになった」「きれいなまちづくりに貢献したい」など、保護者や地域住民が感心する意見があった。活動後の子どもたちの感想では「地域のよいところをたくさん知れた」「みんなが地域のことを真剣に考えていることが分かった」などであった。活動に様子を見守った大人の感想では「今まで気づかなかったことを知れた」「子どもたちの方が意外と地域をよく見ている」などがあった。そして、何よりも印象的だった感想が「大人も子ども同じことを考えている」である。子どもたちの感想にも「地域の大人と一緒に地域を良くしていきたい」とあった。

この活動から、子どもたちの活動の様子に触発された地域の大人が、子どもたちと一緒に協議をしたいという声が上がリ、令和元年6月に、前回の協議内容を踏まえ中学生と地域の大人が同じグループで協議する機会を設定した(図4)。この協議の流れは、①理想の地域像に向けて具体的な行動に移すために、前回のワークショップで出てきた意見の中から1つを選ぶ、②①について実現させていくために必要なことについて考える、の2つである。地域の大人は、各グループ1人で、生徒の意見についてのアドバイスや、大人の視点からの意見を言うてもらい関わり方とした。各グループの意見の多くは、自然を生かした町にするための必要なことに関する意見が多かった。

協議に参加された地域コーディネーターの感想の中で印象的だった言葉がある。それは「これまで思いつかなかった視点をもらった」「このような活動をこれからも行っていきたい」という2点である。前回の活動で、子どもたちが地域のことを真剣に話し合っている姿を見て、子どもたちを巻き込みながら地域づくりへとつなげていきたいという思いが伝わってきた瞬間であった。活動後の振り返りの中で、生徒からは「自然を良くすることで、将来、良い姿になるんだなあと思った。この学習で学んだことを地域の方々と一緒に行えるとよいと思う」「地域の大人もぼくたちもこの地域が大好きだから、今回の学習でよく話し、よく考えることができた」などの意見があった。一方、大人からは「大人も子どもたちに負けない熱い思いをもって町づくりを考えたい」「大人以上にしっかりした意見を知ることができてうれしかった」などの意見があった。

教員は、子どもたちや意見を生かしていくために、意見を価値づけ、子どもたちと地域の教育資源をつないで整理するなどの支援を行い、実際の協働活動へとつなげていく動きが求められる。

2-2 地域の大人とともに学ぶ場の設定(川上中校区「ふるさと魅力化、発見・発信」)

先述した小中合同学習や生徒と大人のワークショップは、共通のテーマや目的がある。それは「地域」をテーマにし、目的は「より良くするためには」である。誰もが関係する共通のテーマであり、向かっていく方向性が同じであることで、異年齢による視点の違いを学ぶことができる活動である。両者の意見や考えを聴くことによって自分の意見や考えを揺さぶられ、両者ともに新鮮な学びとなる。そして、両者を尊重する心も生まれてくる。

筆者は、2019年に実施された「萩市大学連携地域づくり推進事業(地域課題解決事業)」に関わった。こ



図4 生徒と地域の大人との協議

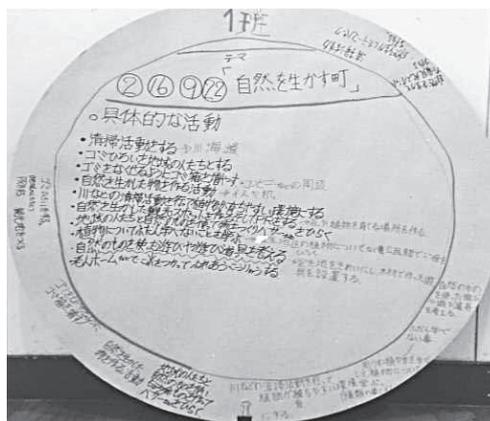


図5 班の意見

の事業は、学生の新しい発想力や活力をいかして、萩市の地域課題解決に取り組むプロジェクトを支援することにより、地域の活性化と合わせ、大学が有する知の拠点機能（教育・研究・社会貢献等）の充実や、地域と学生の交流の促進を目的としている。各中学校区のキャリア教育の推進にかかる方針に対して、先行研究である萩市立大島小中学校の「萩大島ふるさと創造科」の実践内容を参考にするとともに、新たな視点も加えながら、学校を核とした地域の魅力化・情報発信、萩市の未来を創る人材の育成を目指していくものである。筆者は、対象地域の一つである萩市立川上中学校区を担当し、川上地域のさらなる魅力化や魅力発信に向けての取組について、関係者とともに横展開の実践に携わった。

川上中学校区では、地域の魅力化の発見・発信のためには、これまでの地域学習を踏まえ、児童生徒がこの地域をどのように考え、未来にどのようにつなげてきたいのかを共有することが必要であるということから、児童生徒ならではの柔軟な発想を生かして地域の活性化につなげていくために、小中学生による合同学習（熟議）を行った。

合同学習のプログラムは、①川上地域の「良いところ」と「気になるところ」について振り返る、②川上地域を元気にするアイデアを出し合う、③出てきたアイデアをキャッチフレーズ（プロジェクト名）化する、の3つである。このプログラムの展開や学習形態については、先述した萩市立大島小中学校の「ふるさと大島学習」を参考にしている。

プログラム①は、小中合同学習の事前学習として、家庭とともに行う学習と位置づけ、児童生徒の意見だけでなく保護者の意見もインタビュー形式で聴き取るという方式で行った。

プログラム②③は、小学3年生から中学3年生までの異年齢構成のグループを編制し、さらには、地域の大人も各グループに一人加わり、プログラム①で事前に考えた意見をもってワークショップに参加した。

子どもたちから出てきた意見には、「阿武川温泉を生かすためのキャンプ場整備や食事場所の提供」「阿武川でのカヌー体験」「特産品のゆずやアユを生かし、PR活動などによる集客」など、地域資源に目を向けた意見が多くあった（図6）。川上の自然を活用したプロジェクトを計画した班がほとんどで、活動後の子どもたちの感想は、「こんなに川上について考えられたのは、みんなに川上愛があるからと思った」「自分の地域にあるものを最大限に活用することが大切だと思った」などであった。活動に様子を見守った大人の感想では、「子どもが生き生きと話し合いをしていた」「子どもたちはふるさと川上が大好きで、もっと良くしたいという気持ちは大きく、地域の方の関心も高いことが改めて分かった」などがあった。一緒に参加した地域の大人からは「同様のテーマで大人どうしが協議しても意見が出にくい中で、子どもの意見を聴いてとても勉強になった」などの感想があった。

このようなことから、子ども（異年齢集団）と大人の学び（熟議）は、学校や地域の課題解決や魅力化をめざすための学習プログラムとして効果的であると言える。



図6 班の意見

2-3 熟議から協働活動につなげる

協働活動そのものは、様々な場面で実践されている。しかし、活動そのものを行うことが目的となっており、一過性のものになってしまうケースもある。そのようなにならないためにも、協働活動の目的を明確にし、活動の成果をどのように見るかが重要になってくる。先に述べた3-1 地域の大人とともに学ぶ場の設定（埴生中校区「ふるさと発見学習」）において、より良い地域の姿に関して子どもたちと地域の大人がワークショップを行い、すぐに実施できる活動として、社会教育施設「青年の家」の環境美化への取組が多かった。そこで、学校行事の中に位置付けられている地域清掃の活動場所の1つとして「青年の家」を取り入れ、例年PTAが主催する奉仕活動においても、今年度は「青年の家」の清掃活動を行うこととなった。



図7 学校と地域の協働活動

学校行事における清掃活動では、花壇整備やグラウンド除草作業を中心に行った。子どもたちが取り組む活動として、地域住民の参加も数多くあった。PTA主催の奉仕活動では、「青年の家」を中心に駐車場の整備やグラウンドや通路の除草作業を中心に行った。PTA主催で週休日での活動ではあったが、子どもたちが必要と思っていた場所の清掃活動であることから、部活動単位で多くの生徒が参加し、また、地域住民や保護者も多数参加された（図7）。小さな子どもも保護者とともに活動する場面も見られた。学校と地域の協働活動はこれまでもあったが、これまでにない人数の参加であった。このような取組は、シビックプライドにつながる活動で、山陽小野田市が目指す共創によるまちづくりの理想的な形として、山陽小野田市長からも賛同いただいた。

3. 学校・地域連携カリキュラムの開発にあたって大切にしたいこと

新学習指導要領の方向性は、「何を学ぶか」「どのように学ぶか」「何ができるようになるか」を「社会に開かれた教育課程」を通じて実現させていくことである。そのためには「社会に開かれた教育課程」をどのように編成し、共通理解を図っていくかが重要である。

「社会に開かれた教育課程」の根底には、筆者は、子どもも大人も学習者であり指導者でもあるという考えが含まれていると考える。そこで、目標や資質・能力、学習内容を視覚化したものが必要になってくる。それが学校と地域の連携・協働の軸になり得る「学校・地域連携カリキュラム」である。それぞれの地域の実情に合ったものによって実効性の高いものになると考える。

3-1 めざす児童生徒像、めざす地域像、身につけさせたい資質・能力を明確にすること

どのような学習を通じて、子どもたちにどのような資質・能力を身につけさせるかを考えた時、大きな目標としては学校教育目標がそれに該当する。埴生中校区では、令和2年度の学校教育目標を「明るい未来を創る子どもたちの育成」とし、目指す児童生徒像を「自ら進んで考え、主体的な学ぶ子」「温かい心を持ち、周囲と協力して行動する子」「心身を鍛え、粘り強くやり遂げるたくましい子」「郷土に誇りと愛情を持ち、社会に貢献する子」としている。「THE 埴生学」推進のための学校・地域連携カリキュラムでは、これらの学校教育目標やめざす児童生徒像、さらには、学習の目標や学習を通して身につけさせたい資質・能力も明記されている。

さらに、学校・地域連携カリキュラムの特色の一つに、「目指す地域像」を明記したことである。この学習は、子どもたちだけが行うのではなく、子どもたちの学びに大人が関わることで大人の学びにもつながり、地域全体で行うことに大きな意義がある。学習の柱としている「ふるさと発見学習」「起業体験学習」「防災学習」は、学校と地域もこれらの学習による課題解決を図ろうとすることで共通している部分であるため、このことが、地域づくりにもつながっていくと考える。そうすると、どのような地域を目指していくかという視点が必要となる。そこで、設定しているのが「目指す地域像」である。「みんなが主役！自然を生かし思いやりと笑顔あふれる活気に満ちた地域」としているが、先述のように、山陽小野田市都市計画課が行ったワークショップでの意見や、子どもたちが行った「ふるさと発見学習」のワークショップでの意見を集約し、要約したものを「目指す地域像」として設定している。

今後は、人生100年時代やSociety5.0時代の到来が言われる中、学校での学びよりも社会に出てからの学びが中心となり、学校での学びは社会での学びの序章に過ぎないと考える。地域を担う人材としての子どもたちが目標や目指す姿に向けてどのような資質・能力を身につけておく必要があるのかを学校・地域連携カリキュラムに明記しておくことは必要である。

3-2 小中合同研修会による、学校運営協議会委員との学習内容の洗い出し

これまで、カリキュラムは教員のみが作成することが多かった。しかも、特定の教科や領域になると担当教員だけが関わって作成するという動きがほとんどであった。しかし、新学習指導要領の方向性から学校と地域が目指すべき方向性や身につけさせたい資質・能力だけでなく、これらを意図した学習内容も共有することを意味している。つまり、カリキュラムの作成には、学校と地域が一体となって創っていくという過程が求められているということになる。

夏季休業中に例年行っている埴生中校区内の小中学校の教職員合同研修会に学校運営協議会委員も参加し

て、「THE 殖生学」の学校・地域連携カリキュラム作成・検討を行った。事前に各学校の教職員にあらかじめ学習内容を各学年、各担当で「THE 殖生学」の学習の柱である「ふるさと発見学習」「起業体験学習」「防災学習」に関連するこれまでの学習内容を洗い出し、それらをまとめたものを研修会当日の検討資料として用いた。3つのグループに分かれて行き、それぞれに担当の教職員と学校運営協議会委員が1つのグループとなって協議を行った。9年間の学びを視覚化できたという点で有効であり、学校運営協議会委員も高い関心をもって参加された。学びのつながりを実感できたようで、さらに学校間や学年間のよりよいつながりや系統性についても意見や質問が飛び交った。



図8 合同研修会の様子

3-3 身につけさせたい資質・能力と学習内容の関連

学校と地域が連携した教育活動は、今に始まったことではない。これまでも学校支援や地域貢献に関わる教育活動は行われてきた。中には、その取組が長年続いて特色ある学校行事や教育活動の一つに位置づけられている学校もある。一方では、取組を重視するあまりに、働き方改革や業務改善の流れに則って精選や削減も見られている現状もある。目の前の子どもたちの育成を考えた時、将来を生き抜いていくためにどのような資質・能力をどのような活動で身につけさせるかは、大人と子どもたちが共通理解していかなければならない。何をやるにしても、目的があり、取組の過程で子どもたちがどのように変容したかを見取る必要がある。これらの一連の学びの中で位置づけ、次につなげていかなければならない。

学校・地域連携カリキュラムの作成、検討では、おもに学習内容を洗い出すことが中心となった。もちろんこのような活動は必要なのであるが、それぞれの学習内容を価値あるものにするためには、学習を通じてどのような成長を見取ることが大切となる。「THE 殖生学」では、前述のように「関わる力」「考え・追究する力」「伝える力」「見通す力」を身につけさせたい資質・能力として設定している。各学習を通じてこれらの資質・能力の育成につながっているかを常に考えながら活動を計画、実践していく必要がある。そして、活動後はこれらの力に応じた振り返りが必要となってくる。

3-4 学校・地域連携カリキュラムの周知

学校と地域が目指すべき方向性や身につけさせたい資質・能力だけでなく、これらを意図した学習内容も共有のための過程や検討された内容を関係者に周知する必要がある。ここでは、カリキュラムを子どもたちに周知し、意見を聞いた取組について述べることにする。

2学期末に行われた学校運営協議会において、現時点まで作成している学校・地域連携カリキュラムを見ながら、生徒目線による意見表出の場としてこのカリキュラムに関わる協議の時間を設定した。その時に子どもたちを同席させ、一緒に考え共有する機会をもった。参加した子どもたちは新生徒会役員の中学生3人には、事前に現時点でのカリキュラムを眺めさせ、教職員や学校運営協議会委員の考えを伝えた。当日の学校運営協議会では、これまで経験してきた学びの中で感じたことや学びのつながり、さらには、学びを通して身につけさせたい資質・能力などについて意見を述べていた。参加した大人も感心させられる場面も多くあった(図9)。生徒の意見として、「自分たちが殖生地域の魅力を考えることとあわせて、大人たちが考える殖生地域の魅力や殖生に住んでいる理由などを聴いて、自分たちの意見の参考にしたい」「作品制作の活動は、関わる力を身につけることに生かされているけれど、もっと充実したものになりたいと考えるので、考え・追究する力も身につけられると思う。」などが挙げられた。この場での意見を実現に向けていきたいという大人の思いも感じ取ることができた。今後は小学生も加わり、このような会議を計画的に行い、年間計画に位置づけるこ



図9 協議の様子

とも考えていきたい。図10は、これまでの作成・検討をまとめたカリキュラムマップである。

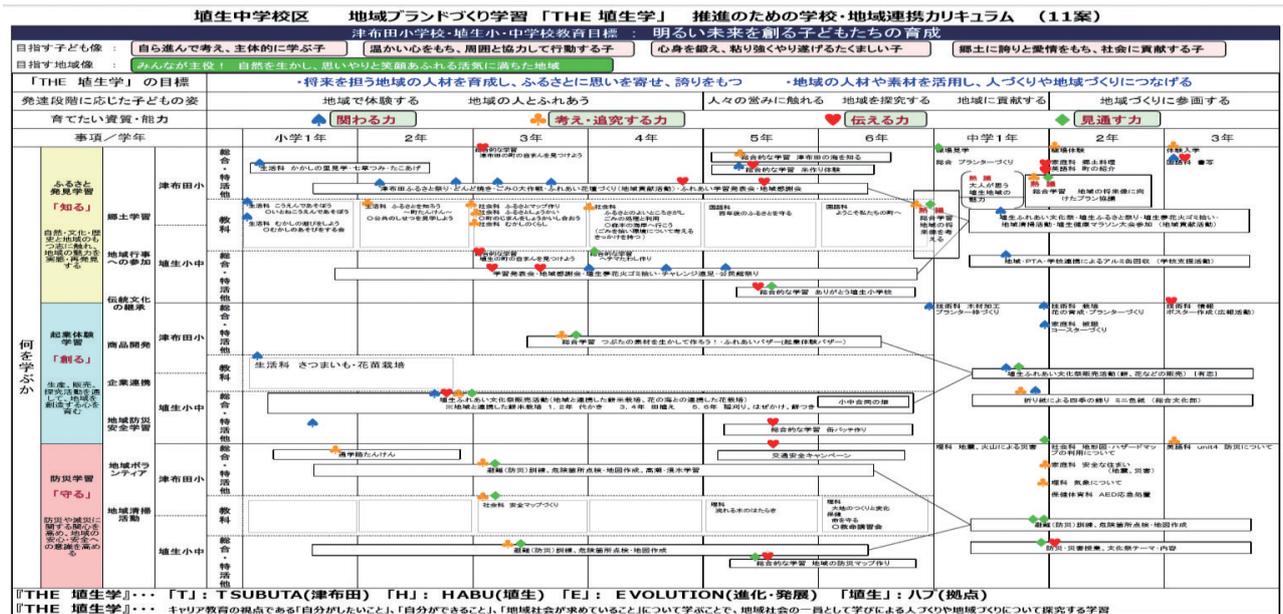


図10 殖生中学校区 地域ブランドづくり学習「THE 殖生学」推進のための学校・地域連携カリキュラム

4. 学校・地域連携カリキュラムづくりから見たこと

以下は、筆者が課題研究を推進するにあたって大切にしてきた視点及び実践について、また実践から見てきたことや分かってきたこと、さらには今後に向けての課題についてまとめた。

【学校と地域の協働活動に関して（子どもの活動を中心に）】

(1) 子どもたちの地域への思いは、大人の心を動かし、地域を活性化させる原動力につながる。

子どもたちの自主性や主体性の育成には、コミュニティ・スクールのしくみを活用できると考える。

「THE 殖生学」でのふるさと発見学習において、小中合同学習で地域について考える実践を行った。初めての取組でもあり、周囲の反応は期待よりも不安の方が大きかった。しかし、実際に取り組むと、子どもたちの生き生きとした表情や活動の雰囲気から、大人顔負けの意見も出てきた。しかも、地域のことを良く知らないと出てこない意見もあった。子どもたちは、大人の知らないところで地域のことをしっかり考えているのである。大人と一緒に地域のための活動を行いたいという意見も大人の心を動かすことにつながった。

そこで、意識したいことは、大人が抱える不安に対して、耐えつつも子どもたちを見守る姿勢である。子どもたちが試行錯誤を繰り返す中で、大人が伴走役として子どもたちと関わり、子どもたちの成長を見守ることが重要であると考えます。

さらに、大人の心を動かすに至った背景には、地域学習という設定されたテーマだけでなく、子どもたちの活動の様子を大人が見ていたという点にもある。子どもたちの自己存在感や自己有用感を高めていくためには、教員や保護者だけでなく子どもたち同士や地域の大人から認められる機会が欠かせない。大人が子どもたちの意見を温かく受け入れることで、子どもたちの意欲や主体性は向上していく。

出てきた意見を具体的な活動へと落とし込むことで、話し合い等のこれまでの学習が生かされることにつながる。自分たちの住む地域のことを考え、できることを実践していく。その活動によって、子どもたちの郷土愛の育成にもつながり、大人の協力も得られやすくなる。地域を学びの場とすることの意義を知ることができる。具体的な協働活動の例であり、人づくりや地域づくりに目を向けさせ、貢献へとつながっていく。子どもたちだけですべてを企画し、地域との協働活動を行うことは容易なことではないが、子どもたち自身がカリキュラム・マネジメントしていける能力を身につけさせたい。子どもたちが、今いる地域に育てられたという実感が、次への取組につながっていく。

【学校と地域の協働活動に関して（子どもと大人の協働活動を中心に）】

- (1) 子どもたちは、地域の信頼できる大人とともに学ぶことで、地域のための貢献意欲を高め、地域を誇りに思う心につながっていくこと。
- (2) 大人は、地域を担っていく子どもたちの思いを純粹に受け止めていること。
- (3) 子どもと大人が同じ考えをもつことによって、具体的な協働活動への機運が高められること。

令和元年6月に行った生徒と地域の大人との協議の中で、より良い地域に向けての具体的な手立てについて、生徒の意見を大人は真剣に聴き、受け止めていた姿が印象的であった。平成31年2月に行った小中合同学習の様子を参観した大人が、将来の地域のことについて子どもたちと一緒に考えたいという思いがあったのである。そして、協議の中で出てきた意見を少しずつ形にしていく活動も子どもと大人が一緒に行った。「子どもたちが活動するのであれば、少しでも協力したい…」大人たちの率直な思いである。学校・地域連携カリキュラムを生徒と学校運営協議会委員がともに検討を行った場でも、生徒の意見を真剣に聴いていた大人の姿があった。そして、実現のための前向きな質問や意見もあった。生徒も、カリキュラムを眺めながらこれまでの取組を振り返ってみると、改めて地域の人に支えられていることが実感できたという感想もあった。「地域の人と一緒に活動を行いたい…」一見、主体性に欠けるような発言にも受け止められるかもしれない。しかし、実は地域の人こそが子どもたちの思っている地域の良いところ、あるいは自慢できるものの一つだったのである。地域の人が集まる会議等でも、子どもたちの挨拶の良さを褒められる。これも地域の人の温かい声かけや眼差しがあつてのことである。子どもたちの成長を長い目で見ている地域の人の存在は大きい。大人が子どもの意見を積極的に評価し、認めていくことが子どもたちの自己存在感や自己有用感の向上につながる。

【学校・地域連携カリキュラム開発の実際について】

- (1) カリキュラムの作成・検討では、目標や目指すべき姿、身につけさせたい資質・能力を決定、共有した上で、学びストーリーを俯瞰できる工夫が大切である。
- (2) 学習の主体者である子どもたちが、大人とともにカリキュラムを共有することは、学習の対象と向き合わせ主体性を育む方法として効果的である。
- (3) 「熟議」そのものをカリキュラムに位置づける。
- (4) 子どもたちにカリキュラムの意味を理解させることで、カリキュラムが価値づけられていく。

「ふるさと大島学習」「THE 埴生学」の取組のしくみを整理すると図11のようになる。

地域の魅力化につながる学校・地域連携カリキュラムの作成・検討においては、目標や目指すべき姿、身につけさせたい資質・能力を決定した上で、これらに向かわせるための学習の精選をしていく方法がある。一方で、まずはこれまでの学習内容を洗い出した上で、目標や目指すべき姿、身につけさせたい資質・能力に向けて篩にかけるようにして学習内容を精選する方法もある。いずれにしても、新たに作るのではなく、今ある学習材を活用しながら、学校や地域の実態に応じて作成・検討を考えていくことが必要である。

先述のように、学校運営協議会での子どもたちとの学校・地域連携カリキュラムに関する共有の機会では、子どもたちにカリキュラムの意味を理解させることに効果的であった。カリキュラムにあるそれぞれの学習活動において趣旨を説明し、振り返りを行うことで、さらにカリキュラムが価値づけられていく。

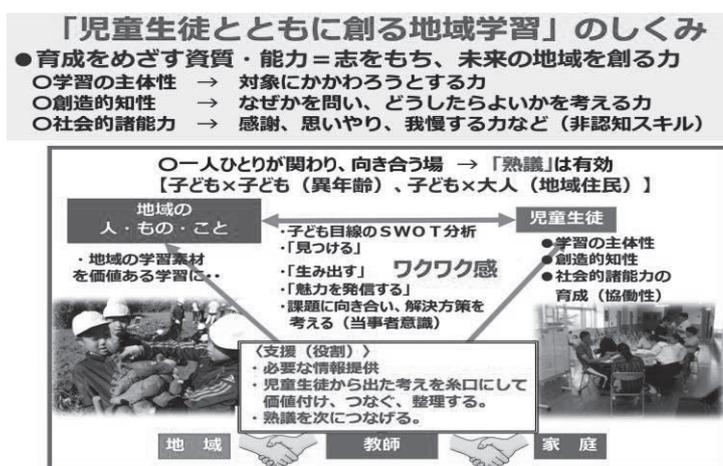


図11 「児童生徒とともに創る地域学習」のしくみ
(山口大学教職大学院 池田廣司教授 作成) 2019. 2

主体的、対話的で深い学びが重要視されている中で、授業においてもグループ学習等も工夫が見られるようになった。そのような中「児童生徒とともに創る地域学習」の中で行う「熟議」は、効果的なワークショップである。熟慮と議論を重ねることが関係者の当事者意識の高揚につながり、より高度な学習方法になり得る。子どもたちがこのような学習方法を身につけておくことは将来において役に立つ。そこで、カリキュラムそのものに熟議を位置づけることは意義高い。

おわりに

子どもたちがどのような人生を送るのかを大人たちが見守り関わっていく中で、どのような大人になりたいのか（なあってほしいのか）、そのためにどのような力を身につけたいか（身につけさせたいか）を考えていく必要がある。さらに、自分たちの住む地域をどのような地域にしたいのか、を考えることも併せて必要になる。このような学びを充実させるためには、学校と地域が目標やビジョンを共有し、地域ぐるみで子どもたちの学びや育ちを支えていく仕組みとカリキュラムを根づかせていくことが大切である。

学校教育と社会教育、学校と地域の関わりについて、一体的に推進し、現在では「支援」から「連携・協働」へと変わりつつある。それぞれが単体の組織として存在し、互いを助け合うことが「連携」であり「支援」である。一方で、それぞれの組織が交わりながら共通の目標に向かって歩むことによって、それぞれの組織の目標達成に向かうことが「融合」であり「協働」であるとする。子どもたちの教育も地域の活性化もみんなが主役である。そしてみんなが将来恩恵を受ける。誰もがこのような社会が訪れることを願っているのであれば、一部の人ではなく、みんなで関わり合いながら未来を創っていくことが望まれる。そのためには、子どもたちだけでなく、大人も学びの機会が必要である。「学校教育が教育の本丸という概念を捨てること」「学校教育関係者は社会教育のことを、社会教育関係者は学校教育のことをそれぞれ語れること」。みんなが当事者で教育に関わっていく社会こそが将来の社会であると信じている。

付記

本論文の内容は、山口大学大学院教育学研究科教職実践高度化専攻の実践研究報告書に加筆・修正を加えたものである。

参考文献

- 貝ノ瀬滋（2017）：『図説コミュニティ・スクール入門』、一藝社。
- 文部科学省・山口県・山口県教育委員会（2015）：『平成27年度地域とともにある学校づくり推進フォーラム（山口会場） 山口県コミュニティ・スクール推進フォーラム』
- 中央教育審議会（2016）：「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）」
- 中央教育審議会（2015）：「新しい時代の教育や地方創生の実現に向けた学校と地域の連携・協働の在り方と今後の推進方策について（答申）」

文献

- 近江誠一郎：学校と地域が連携・協働した活気に満ちた地域づくりー埴生地域協育ネットの事務局機能の充実を図る体制づくりー、「令和元年度山口大学大学院教育学研究科教職実践高度化専攻実践研究報告書」、2020